

## 21世紀の日本のかたち（88）

### 建築について（2）

#### 吉阪隆正＋U研究室の設計



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

### 1. ヴェネツィア・ビエンナーレ・日本館

ヴェネツィア・ビエンナーレ・日本館（1956年6月竣工）は、吉阪隆正研究室の創生期の瑞々しい建築です。

この日本館で初めて展示された棟方志功の版画は、1956年度ヴェネツィア・ビエンナーレ国際版画大賞を受賞しております。日本館は現在も隔年行われているヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展の日本展示の会場として活用されて今も息づいております。

吉阪が戦後第1回フランス政府給付留学生として、ル・コルビュジエの下での研鑽（1950～1952）を終え、早稲田大学建築学科教室の一角に建築・都市設計のために吉阪隆正研究室を構えたのは1954年ですが、その年にヴェネツィア・ビエンナーレ・日本館の設計依頼があったのです。

施主は日本美術家連盟、美術評論家連盟が中心となった日本館建設の準備委員会でした。それまで伝統あるヴェネツィア国際美術展に日本は他館に間借りしていたものを自前の展示場を持ちたいということで委員会が作られ、その設計者に吉阪が指名されたのです。

設計条件としては、会期は6月中旬～9月中旬（隔年）で会期以外は閉鎖、樹木は径60cm以上は伐ってはならないこと、建坪60坪内外、

予算2,000万円程度、70mの絵画展示面と簡単な収納場所が必要、などが示されましたが、吉阪研として、敷地の高低を十二分に活用し、自然をできるだけ生かすこと、<日本的>ということに特にとらわれないようにすることでした。（吉阪のヴェネチア日記より）

創生期の吉阪研究室のメンバーはごく少人数でしたが、この中に吉阪の終生のパートナー、大竹十一がおり、吉阪の考えやアイデアを“原寸”として実体化する建築家でした。

私が吉阪研に参加したのは1959年でしたので、日本館設計当時の研究室の状況を直接知らないのですが、入室して与えられた仕事が「ヴェニス・ビエンナーレ・日本館」の設計記録の整理でした。これは「建築学大系39・鉄筋コンクリート造設計例 - 設計：吉阪研究室、施工：マンテリ・サカイク、彰国社、1959.10」にまとめられ出版されております。

日本館建設の場所はイタリアの北部、アドリア海の奥に在る水の都ヴェネツィアのビエンナーレ会場の一角ですが、日本館の設計記録の整理作業はまるで推理小説を逆（解決の後）から読むといったものでした。設計条件に対する室員の様々なアイデアや提案、エスキースが幾枚もありました。

最終案が設計期限ぎりぎり、吉阪がヴェニ

スの現場を確認するべく、飛行機旅行の途中、暑いカラチ辺りで「日よけルーバー。天井をルーバーにしたら。もう私はローマへ着くのが待ち遠しくなった・・・」。結局、最終案は最も単純な方形一卍字状の壁柱に支えられた、16m×16mの平面、高さ5mのシンプルな箱型にまとめられました。コルビジエの無限成長美術館のコアのようにも感じられます。

ヴェネツィア・ビエンナーレ・日本館の建設の現場監理には吉阪と大竹が現場に張り付いて行っていますが、この間の1956.3.12(月)曇・風作業始め～6.10(日)雨、開館披露パーティーの記録が二人の日記として残されています。

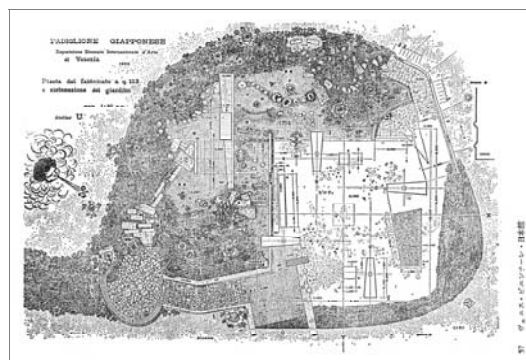
材料については、イタリア建築に特有の大理石を床面、外壁の塗装などにいかに活用するかと、現場で生きた設計管理の進行ぶりが手に取るように読みとれます。大竹の執拗なまでの細部、原寸へのこだわりは日記とともに図面として残っております。

私がヴェネツィア・ビエンナーレ・日本館を実際に目の当たりにしたのは、建設から10年余りを経過した1967年夏でした。この年はヴェネツィア国際美術展が無い年で、残念ながら内部を見学できませんでしたが、木目細かく、しつらえられた庭、卍字の壁柱のつくり出すピロティとこれに支えられた方形の本体、日本の蔵をも思わせます。外壁の石灰漆喰塗はイタリアの伝統的な大理石の粉末を混ぜる技法が用いられており、この壁に木々の緑の濃淡の影がきらきらと美しく写っていたことでした。ビエンナーレ開催時には、閉じていた内部空間も開放されて、さぞ日本館が華やぐなのでしょう。

ヴェネスは建築・都市設計に関わるものとしては特段に興味深い街です。水路が張り巡らさ

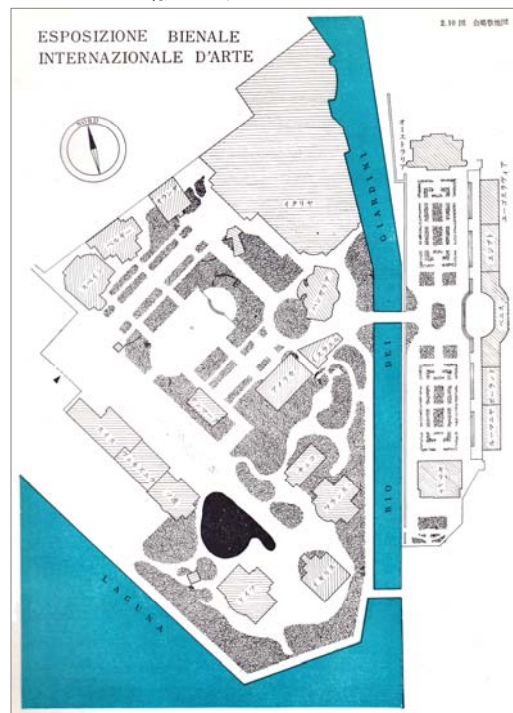
れた自動車のいない歴史の都、水の都、床や壁には宝石のような大理石のモザイクが張られた寺院、サンマルコ広場などはなんとも情感が溢れておりました。その一角に1950年代、グローバル時代に先駆けて、吉阪研究室が設計したビエンナーレ・日本館が21世紀に残る建築として現在も役目を果たしているはなんともうれしいことです。

図1 ヴェニス・ビエンナーレ・日本館  
ブロックプラン



資料：「建築学体系39」彰国社 1959.10

図2 ヴェニス・ビエンナーレ・日本館  
敷地(黒いエリア)



資料：「建築学体系39」彰国社 1959.10

写真1 日本館



資料：「建築学体系39」彰国社 1959.10

写真2 日本館 入口廻り



資料：「建築学体系39」彰国社 1959.10

写真3 日本館内部 棟方志功の版画が見える



資料：「建築学体系39」彰国社 1959.10

## 2. 東京・八王子大学セミナー・ハウス

東京都心から北西 40km の多摩丘陵の一角に森のような緑濃い環境の中に大学セミナー・ハウス(U研究室設計)が今も息づいております。

この大学セミナー・ハウスは、早稲田大学吉阪隆正教授(建築学科)がアルゼンチン・ツクマン大学の2年間(1961~62)に渡る招聘教授の任を終え、帰国して間もない1962年暮れに設計依頼の話があり、1963~1964年の設計期間を経て、65年5月に第1期の建築群(本館、サービスセンター、中央セミナー館、居住ユニット、各セミナー室)が竣工しました。以来、第2期、第3期と、集落、村落が出来るように、1967年：図書館、教師館(松下館)、1970年：長期セミナー館、1973年：屋外ステージ、国際セミナー館、1975年：遠来荘(民家移築)などが次々に建設されております。

大学セミナー・ハウスの用途は、国公立を問わず、大学に開かれてゼミナールなどの合宿が出来るようにと企画されたものです。

1960年代の我が国の大学の状況は、経済的には高度成長期、大量生産、大量消費、環境破壊問題、政治的には安保問題をめぐる学園紛争などがあり、マスプロ教育など大学自体、大きな問題を抱えておりました。

この状況下、私大の大学運営に携わった経歴を持つ福島の人、飯田宗一郎氏が、強制や権威的思考とは無関係な、マスプロ教育の弊害をただす教師と学生が、起居を共にし、親しくゼミナールなどの小集団教育をする施設の構想を抱き、早稲田大学総長(大浜信泉)、東京大学総長(茅誠司)、日本女子大学学長(上代たの)、三井銀行頭取・佐藤喜一郎氏などの賛同を得て、大学セミナー・ハウス建設準備委員会を立ち上げました。



図3 村のイメージをもつ  
大学セミナー・ハウス



(戸沼作図)

吉阪の日記には、1962年暮れに、大浜信泉早大総長の仲介で飯田宗一郎氏とはじめに出会ったと記されています。

大学人としての吉阪にとっても、飯田氏の大学セミナー・ハウス構想は共感するものであり、理念をいかに形にするか、建築にするかに強い意欲を持ったことでした。ただ、そこから始まる莫大な設計作業に見合う設計料についての皆の無頓着には、吉阪も閉口しておりました。私はこの時期、吉阪教授の下で大学院博士課程におり、大学セミナー・ハウス企画委員会への吉阪の代理出席などに駆り出されたりしました。吉阪の日記によると、1962年11月26日、一人ぐらゐを手元に置いて、問題の解きほぐしを行うとありますが、それが私というわけです。幾度か現場を視察しましたが、指導教授から宿題を与えられた学生の図です。

私は1963～64年、U研究室員として、全体の配置計画・ブロックプランを担当することになりました。課題条件は、大学セミナー・ハウスの敷地は八王子郊外の柚木村(当時)の丘陵地、約1万7千坪、予算、土地代を含めて3億円程度、目的は200人の教師、学生集団の研修施設づくりです。

測量会社の作成したコンター(高低)の入った1枚の土地条件図を基に、500分の1の油土模型が作られ、吉阪邸の敷地に建てられたプレハブのU研設計室の中央に置かれました。吉阪、大竹十一、松崎義徳、滝沢健児他の室員が、吉阪を中心にアイデアや考え方やらを述べ合いました。

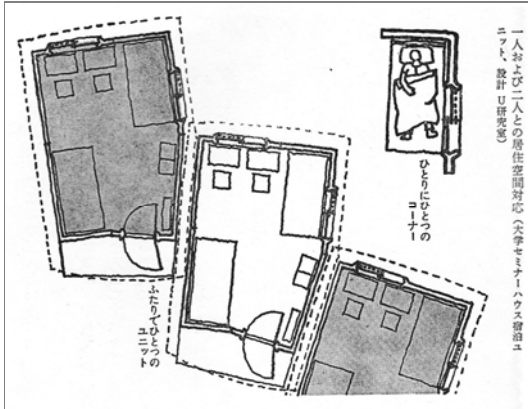
私はそれを横目に、500分の1の敷地図に200人のゼミ集団のグループ分けをいくつも想定しつつ、図面に落とす作業を1年余にわたって、私自身熱中して行ったことを覚えています。

1963年3月初め頃のノートには、200人の集団のためのグループ分けについて、1人、2人、7～8人、20人、30～50人、200人、集まり方：精神的—セミナー室、生理的—食堂、大浴場、肉体的—運動、散歩、偶然—ロビー、通路、広場、などあれこれ想定しつつ、多摩丘陵を傷つけることなく、敷地の丘と谷の土地利用についてのエスキースを重ねました。

紆余曲折の末、本館を外部からの入口に近い北の丘の上に、中央の尾根筋から南に広がる緩急のある斜面に、7群のセミナー村を配置することになりました。本館とセミナー群(村)とは中央の尾根に設定された直線路でつながっております。複雑な地形に配置されたセミナー村では、時々、ゼミ参加者が道に迷ってしまうのに配慮したものです。宿舍ユニットについては、当初1人1戸を想定しましたが、数が多すぎる

のと治安のことも考慮して、2人1組案に落ち着きました。

図4 居住空間



(戸沼作図)

#### 宿泊ユニットの形状と配置

2人用の宿泊ユニット100戸のグルーピングと配置については、幾度も試行錯誤し、7群(中小セミナー室につなげて、各9~13戸)に分けましたが、比較的なだらかな地形については囲み型、急斜面については平行直線型にレイアウトしました。これには私のスキー体験、緩斜面ではボーゲン、急斜面ではキックターンを思いながらの作業でした。

宿舎村のレイアウトについては、斜面に馴染むように将棋の駒をイメージして並べていたのですが、ある時、大竹が1辺が斜面する4×8尺(120×240cm)の直角パネルを組み合わせた模型を造って私に示してくれました。全く「ドン、ピシャリ」でした。

大学セミナーの本館は、多摩の丘に楔を打ち込むように逆ピラミッド型の形状をしておりますが、この案の生まれた朝のこともよく覚えております。

私の案では、本館建設に想定された丘の二つの小山を活用して、これを藤棚風の橋状の建築

としたものでした。締切も近くほぼ皆もこれに同意していたのですが、ある朝、研究室へ行くと、本館が逆ピラミッドの形になっていたのです。中央セミナー館が小さなピラミッド型に設計されていたのですが、滝沢がこれをヒョイと逆にして油土の敷地模型の本館の場所に置いたのです。本館の機能は、地上の受付と200人のための食堂ですが、一堂が会する食堂が最上階にあると、多摩の丘の全体が見渡せることもあり好都合なわけです。

コンクリートの本館の実施設計は松崎が中心になり、私の後輩達の幾人もが細部の造作を原寸図を画いて取り組んでおりました。

私と大学セミナー・ハウスとの係わりは、第1期、1965年7月竣工の本館、サービス交友館、中央セミナー館、宿泊ユニットと各セミナー室あたりまでです。その後、1967年、図書館、講堂、1968年、教師館(松下館)、テニスコート、1970年、長期セミナー館、1973年、国際セミナー館、屋外ステージ、1975年、遠来荘(民家移築)と続き、かつて裸地であった大学セミナーの丘も、国公立各大学や民間の団体のセミナー利用者が記念植樹を続けて、今では緑に覆われた森になっております。

大学セミナー・ハウスの現場管理は、私の兄弟子の松崎が最後まで担当しましたが、松崎は私が1964年に画いた第1期のブロックプランの図をそのまま活用し、その後の増築の建築と外部空間の変更も書き加えておりました。このトレーシングに鉛筆で書き込まれた図面はボロボロになって残っております。

長期にわたる大学セミナーの設計には、個性を持った多勢の後輩達も加わっておりますが、この不連続の連続の様なU研究室の作業の仕方を含め、大学セミナー・ハウスはU研究室の代

表的作品といってよいと思います。この創作集団にあって、吉阪は、各自の個性を引きだしつつ一つの創作にまとめ上げるオーケストラの指揮者にも似ておりました。

写真4 大学セミナー・ハウス（鳥瞰）



(大学セミナーハウス絵葉書)

写真5 本館



(大学セミナーハウス絵葉書)

写真6 宿泊ユニット（外部1）



撮影：松本泰生

写真7 宿泊ユニット（外部2）



撮影：松本泰生

写真8 教師館（松下館）



撮影：松本泰生

### 3. 吉阪隆正の設計についての考え方 - 不連続 統一体

先日、私の書棚から吉阪隆正手書きの 21cm 角の面白いパンフレットが出てきました。日本語と仏文です。題して「DIS-CONT の名の由来と提案」。

このパンフレットは、1963. 6. 30 に東京大学の丹下健三氏が呼び掛けて、幾人かの建築家が集まり、勉強会があったときに、参加者に吉阪が配付した資料でした。この時、私もお伴したのでよく覚えております。

建築や、都市・地域の計画を様々な個人の集団創作として捉え、これを推し進めようとした大学人でもある吉阪の考え方が素朴に現れてい

ると思え、ここに再現しておきます。

### DIS-CONT の名の由来と提案

今（1963年）をさかのぼる5年前、「不連続統一性」という言葉が生まれた。欧州の言葉に訳する必要から正訳ではないが当時は「Discontinuous Continuity」、約してDIS-CONTとなったのである。

はじめて発音された当時は一同はまだよくその意味を掴めなかったが、問題の核心を端的に表現しているという確信はあり、それまでの迷いの雲は一朧に晴れた思いであった。この言葉の命ずるままに製作は行われて、三回連続一等<sup>(注1)</sup>の栄を確保できたのであった。この言葉が現代の建築、都市及び地方計画の案の作製に役立つことはこれで証明された。

そして又同じ年の秋には200人余の学生を動員して一つの展覧会が計画され、再びDIS-CONTが計画推進の指針となった。そればかりでなく、この言葉は大勢の学生が作業するための組織の案出にも効果を発揮したのだった。すなわち集団での製作、大量の学生の教育にも有用であることが証明された。<sup>(注2)</sup>

さて近頃私の関心は、この世をより住みよくしたいと努力している小さなグループの弱い力だが真剣にもがいている者たちを何とか結集してもっと実り多い力のあるものにしたいということだ。大資本への集中、大都市への集中から生じる具合悪さへの循環を断つための何かが必要だ。それを探するため私は再びこのDIS-CONTの言葉に救いを求める。

不連続統一性という表現は適切であるかどうか疑わしい。もっといい表現があるかも知れないが、今はその略称DIS-CONTという言葉で、その概念を探って見るならば、次のような思考を

代表しているのではあるまいか。

1. 自然界の現象は無限小から無限大まで連続して存在している。例えば音にしてある振動のものがないということはない。

ただ人間がこれを観察したり感じたりする時には全部を区別できないので、不連続なものとして扱った方が理解し易い。

しかしまた勝手にバラバラに分割してしまえば混沌とした迷いの世に戻ってしまうので、その切り方に一定の秩序が欲しくなる。

この所の人間の精神活動を不連続体に切りながらも、それらに統一性を与えようとするのをDIS-CONTと称しているといってもよい。

2. これを人間の集団について当てはめて見ると、今日の理想とされている民主主義を確立しようというのも同じではなからうか。個性の尊重と全体の利益との調和を、小は個人と集団との間に、又大小の集団相互に、幾段階かを経て人類全体あるいはそれ以上に確立させようとしているのである。

もし存在が空間を占拠することで表わされるならば、各段階の集団の関係が調和的であることは空間にも示される筈である。空間を扱うことは私たちの専門に属する。だから建築家は空間に秩序を与えることで、より調和した生活を可能にしてあげなければならない。

3. 空間を秩序立てる際にDIS-CONTは利用され得る。空間を構成している要素を考えて見れば、同質連続なものの個性の尊重、区別された物同士の統一が求められる。

何故に山は平野と、平野は海と違おうとし、床は壁、壁は天井と区別するのだろうか。構造体だけの中にメジャーやマイナーを識別するのは見る目によってである。区別することによって全体を結びつけようともするのである。

4. さてここで私は創作活動や靈感の交流のために、DIS-CONT を利用したいと考える。今日それらの活動は各地に随時に散発していて全く不連続である。何かでこれをつなぎとめるならば各個が持っている不安、間違っていないだろうか、無益のことではないのか、という焦燥を取り除き、又独断のひとりよがりの殻を破れはしないだろうか。

発表することは第一歩だが不十分だ。相互交流の記録にとどめられることでいつでも生かされ又発展の経路を辿れる。同じ規格のファイルが可能なら更に促進されるであろう。

Team X は Le Carre Bleu で既にそれを始めている。その規格を採用しよう。さて我々のパンフレットを DIS-CONT と命名しようと考えたが、その考え方を頭文字を利用して内容の説明を加えることにした。曰く、<sup>ドコ デモ イツ デモ</sup>Doko demo, <sup>ソレゾレガ コンナ コト デモ オモイキッテ</sup>Itu demo, Sorezorega, Conna koto demo, Omoikitte, <sup>ナンデモ テイアン ショウ</sup>Nandemo, Teian siyo!

アイデアは社会に流通し、著作権はパンフレットが守る。(1963年6月30日)』

私の書棚から次の一文も出て来ました。

『建築の設計は、世界観、人生観にはじまる。

それを形姿あるもので表現しなければならぬ。

通常の平面、立面、断面では表現し切れない。

最後には肌でふれる材質と、そのすがたに頼るほかあるまい。

これによって、古来いわれてきた「用と強さと美」の総合を求めたい。

図面は、こうした考えの記号的表現である。

昭和50年正月 隆正』

吉阪隆正(1917~1980)は戦争体験を持ち、戦後、大学人として、建築家として、多くの業

績を残しました。晩年、組み立てようとした有形学では建築にしる形を創るのは世界平和、人類の平和共存のためとっていました。

吉阪が主催した吉阪研究室、U研究室の膨大な手書きの建築図面は、文化庁・近現代資料館に収められております。

今、開催されている「ル・コルビュジェ×日本—国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」展につづいて、この暮れから来年にかけて、「建築家—吉阪隆正」展が開催される予定です。戦後70年、日本は様々な場面で変曲点に立たされております。日本のかたちの具体的担い手である建築家の役割、責任についても、改めて考えてみたいものです。

この文章も師匠と対話しているという感じなのですが、今、話題となっている2020年、東京オリンピック・パラリンピックの主会場となる新国立競技場についても、建築家吉阪隆正の意見とアイデアを聞いてみたいところです。

注1) 1954、55、57、ブラジルサンパウロピエンナーレ、第1、2、3回学校単位設計指導

注2) 1957年の早大建築学科教育プログラム報告書「不連続体統一の理論による集団創作について」早大理工学研究所報告第12(1959.5.22)吉阪・戸沼・鈴木、吉阪隆正集II、不連続体統一、収録

(2015.08.25)